

Title	巻頭言
Sub Title	
Author	安藤, 寿康(Ando, Juko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2016
Jtitle	哲學 No.136 (2016. 3) ,p.1- 2
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：教育学 寄稿論文
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000136-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

卷頭言

われわれ慶應義塾大学文学部の教育学専攻は、それ自身が university, つまり総合大学と言っているほど、その関心、方法論、表現形式の多様性を持っている。大雑把に分類しても、理論（哲学）的アプローチ、歴史的アプローチ、比較的アプローチ、心理学的アプローチがあり（これをわれわれは4本柱と呼んでいる）、理論的アプローチの中には分析的アプローチをする人や解釈学的アプローチをする人などが、歴史的アプローチには近世に関心を持つ人や近・現代に関心を持つ人などが、比較的アプローチにはアメリカに関心を持つ人やヨーロッパに関心を持つ人などが、そして、心理学的アプローチには動機づけや児童発達に関心を持つ人や遺伝・進化に関心を持つ人などがいる。社会科学に属する学問分野は、いずれにもこうした多様性のアマルガム的な側面があるが、それにしても教育学の「寄り合い所帯っぶり」は、ほかの領域の人から見たら、どこに「教育学」というディシプリンがあるのだといぶかしがられるほどのとりとめのなさである。

ディシプリンが共有された理論や方法論やその習得のお作法を意味するならば、確かに確固としたディシプリンがあるわけではない。われわれは一応そこに「教育に対する関心」「人間形成や人間の成長に対する関心」が共有されていると思っているが、一人一人が持つ教育観や人間形成のイメージもまちまちだ。それらが一つの組織を作っているところは、世界広しといえども、そうそうあるわけではないようである。

だがこのゆるい寄り合い所帯がいいのである。

昨今、文科省あたりから「文理融合」だの「領域架橋」だののお題目が託されるようになり、漢字カタカナまぎりのやたらに長い名前を冠した学

巻頭言

部や領域が、雨後の筍のように現れるようになった。しかし、どこもうまくいっていないと聞く（うちは違うと思われた関係者にははなはだ失礼な言い方が、本当にそうなら祝福したい）。だがおそらくそういうスローガンで期待されている知の交流のために必要な環境とは、われわれのような、ゆるい、そして自由さをもった多様性に日常的に触れていられる環境なのだと思う。われわれはそれを、いろんなテーマに自由に取り組む院生たちと教員たちとの間の日ごろのディスカッションや、専攻内の研究学会である「三田教育学会」の発表会などで、長年の間味わいつづけている。その雰囲気や、この特集号の中にも感じ取っていただけるだろう。

本巻には博士課程の院生5人、教員3人の最新の研究成果が収められている。お断りしておくが、「領域架橋」を地で行っているからといって、期待されるような驚くべきイノベーションが必ずしも起こっているわけではない。お読みいただければわかるように、どれも伝統的な問題に地道にとりくんだ成果であるといえよう。こうしたさまざまなテーマに正統的にアプローチする姿を互いに示し合う中に、小手先の目新しさではない真のアカデミックな進歩が生まれるのである。

安藤寿康